聖アントニウスの物語　　ベネズエラ

昔むかし、あるところに男の人とおかみさんが住んでいました。ふたりには、子どもがいませんでした。ふたりは、さびしかったのですが、それが運命なのだとあきらめていました。やがて、男の人は、年をとって亡くなりました。おかみさんはひとりぼっちになりました。

ある日のこと、おかみさんは、いつものように、森へたきぎを取りに出かけました。すると、見たことのない大きな木を見つけました。そのみごとな枝を、おので切り落とそうとすると、

「切らないで、お母さん。切らないで」と、声がしました。おどろいてあたりを見まわしましたが、だれもいません。それで、またおのをふり上げると、またさっきの声がしました。

「切らないで、お母さん」

おかみさんは、やぶの中をあちこち探してみましたが、やはり、だれもいませんでした。それで、またおのをふり上げると、またまた、さっきの声がしました。

「切らないで、お母さん。切らないで」

おかみさんは、そのときになってようやく、目の前のみごとな枝に、かわいらしい男の子がすわっているのに気づきました。おかみさんは、すぐにその子を抱き下ろして、家に連れて帰りました。そして、その子に、アントニオと名前をつけて、わが子のように大切に育てました。

アントニオが、十歳になったとき、おかみさんは、アントニオにぶたの番をさせてみました。アントニオは、ぶたを一頭も逃がさないで、ちゃんと番をすることができました。それからは、村の人たちも、アントニオにぶたの番をたのむようになりました。村の人たちは、お給料をくれたので、アントニオとおかみさんは、そのお金で暮らしていくことができました。

やがて、アントニオは、ぶた飼いの頭（かしら）になりました。そして、ほかのふたりの若者といっしょに、村じゅうのぶたの番をするようになりました。

そのころ。そのあたりに、ひとりの悪い魔女が住んでいました。魔女は、悪魔からもらったふくろと笛を持っていました。魔女が歌いながらその笛を吹いておどると、見た

人はみんな、まほうにかけられて、魔女のすがたに心をうばわれ、ふくろに飛びこんでしまうのでした。ふくろに入れられた者は、だれも帰って来ませんでした。

ある日のこと、魔女が、歌いながら笛を吹いておどっていると、空から太陽が見て、まほうにかかって、ふくろの中に飛びこんでしまいました。魔女は、太陽と自分の娘を結婚させようと考えました。そして、ふくろをかついで帰って、太陽を地下室に閉じこめました。

こうして、人間や動物や植物にとって、ひどい時代が始まりました。太陽がいなくなると、何も育たなくなり、食べる物もなくなってきたからです。

ある日、アントニオは、いいました。

「お母さん、こんなひどいことはもう終わりにしたい。ぼくが太陽を助け出してくる」

アントニオは、かわいがっていたぶたを一頭連れて出かけました。空には太陽はなく、雨ばかりが降っていました。どしゃぶりの中を、長いこと歩きつづけて、ようやく魔女の家までやってきました。アントニオは、戸をたたきました。

「だれだね」と、魔女の声がしました。

「道に迷ったあわれなぶた飼いです」

「そこにつっ立ってるがいいさ。この家には、キリスト教徒を入れるわけにはいかない」

「それじゃ、ぶただけでも中に入れてください。こごえて死にそうになってるんです」

「ぶたはいいが、おまえはだめだよ」

魔女はそういって、ほんの少しだけ戸を開けてやりました。ぶたは、そのすきまから、家の中に入りこみました。アントニオは、少しでも雨を避けようと、背中を家の壁にぴたりとつけてすわりました。

ぶたは、家の中に入ると、いきなり、部屋じゅうを走り回りました。椅子を倒すやら、テーブルの足にぶつかって、つぼを落とすやら。魔女は怒って、杖を取ってぶたに殴りかかりました。けれども、ぶたは、とてもすばしこくて、いっこうに当たりません。魔女はくたくたになって、すわりこんでさけびました。

「そこの若い人、入ってきて、このぶたをおとなしくさせておくれ」

アントニオが入ってくると、とたんにぶたはおとなしくなって、アントニオの足もとにうずくまりました。アントニオは、

「ここで少し休ませてください。もうしばらくして月が出たら道も見つかるでしょうし、

ぶたを連れて出ていきますから」といいました。
やがて、食事の時間になると、魔女は、地下室におりる戸をあけました。すると、家の中が、ぱっと明るくなりました。地下室に、太陽が閉じこめられていたからです。魔女は、太陽のために食べ物と飲み物を持って、地下室に下りて行きました。そのすきに、アントニオは、ふところから眠り薬を取り出して、かまどの上のおかゆのおなべに入れました。
魔女は、もどってきて、テーブルにつくと、おかゆをお皿によそいました。そして、意地の悪い目つきでアントニオを見て、
「キリスト教徒には、食べ物はやらないよ」といいました。魔女は、ぶたにはおかゆをやりましたが、ぶたは、食べようとしませんでした。
魔女は、おかゆを食べてしまうと、とたんに眠くなって、あくびをし始めました。そして、ついに眠りこんでしまいました。
アントニオは、魔女がぐっすり寝こむのを待ってから、地下室に下りていって、太陽を助け出しました。ふたりは、音を立てないように、家の外に出て行きました。たちまち、降り続いていた雨がやみました。太陽は、
「アントニオ、助けてくれてどうもありがとう。もしわたしの助けがいるようなことがあれば、いつでも呼んでくれ。すぐにかけつけて、きみの力になろう」といいました。
太陽は、空に帰り、アントニオは、ぶたを連れて村に帰っていきました。
魔女が目を覚ましてみると、太陽もぶた飼いの若者もいません。魔女は、だまされたと気づいて、
「待っていろ！今すぐつかまえてやるからな」とさけぶなり、まほうのふくろと笛を持って、ふたりの後を追いかけました。
アントニオは、村にもどって、ふたりの若者といっしょに、ぶたの番をしていました。遠くから、魔女がやってくるのが見えたので、アントニオは、ふたりといっしょに、一本の高い木に登りました。そして、ふたりに、
「いいか、あの女がここに来ても、けっして下を見るんじゃないぞ」といいました。
魔女は、アントニオたちが木の上にいるのを見つけると、笛を取りだして吹き始めました。そして、歌いながらおどりました。
「緑の野原に

甘(あま)い口づけが待ってるよ」

とてもすてきな歌だったので、しばらくすると、若者のひとりが思わず下を見てしまいました。そして、おどっている魔女のすがたを見たとたん、木から下りて、ふくろの中に飛びこんでしまいました。

魔女は、さらに、歌いながら笛を吹いておどり続けました。

「緑の野原に

甘い口づけが待ってるよ」

しばらくすると、ふたり目の若者が、

「なんてすてきな歌なんだ」といって、下を見てしまいました。この若者も、木から下りて、ふくろの中に飛びこんでしまいました。

魔女は、なおも歌いながら笛を吹き、おどり続けました。

「緑の野原に

甘い口づけが待ってるよ」

アントニオは、だんだん魔女の歌声に引きこまれそうになりました。そこで、ナイフを取り出して親指を切り、痛みで、まほうから逃(のが)れようとしました。血のしずくが木の上から落ちてくるのを見ると、魔女は舌(した)なめずりをしました。そして、落ちてくる血のしずくを受け止めようと、口を大きく開けました。そのひょうしに、魔女は、笛を地面に落としてしまいました。すると、そこへ、ぶたがかけてきて、笛をくわえて逃げ出しました。魔女は、ぶたを追いかけましたが、ぶたはすばしこくて、なかなかつかまりません。ぶたは、魔女をじゅうぶんに引き離してから、後ろをふり向き、歌いながら笛を吹いておどりだしました。

「緑の野原に

甘い口づけが待ってるよ」

それを聞くと、魔女は、どうにも逆(さか)らえなくなって、ふくろの中に飛びこんでしまいました。ぶたは、さけびました。

「アントニオ、もう下りてきても大丈夫(だいじょうぶ)ですよ。魔女は、ふくろの中に閉じこめましたから」

アントニオは、木から下りてきて、ふたりの若者をふくろから出してやりました。魔女はふくろに入れたままにしました。そして、空に向かってさけびました。

「太陽さま！」
「やあ、アントニオ、何をしてほしいんだい」
「魔女の入ったこのふくろを焼いてくれませんか」
「ああ、喜んでやってやるよ」
太陽は、魔女の入ったふくろを受け取って、燃やしてしまいました。
アントニオは、ふたりの若者に笛をあたえました。そして、ぶたといっしょに砂漠（さばく）の奥深く入って行って、そこで聖者アントニウスとなりました。
おはなしは、これでおしまい。おもしろかったら、もうひとつお話ししましょうか。
でも、つまらなかったのなら、だまって笛を吹くことにしましょう。

村上郁再話

資料『世界の民話３１カリブ海』瀬戸武彦・伊藤富雄・持尾伸二訳／ぎょうせい